

2017年度第1回物学研究会レポート

「この国のゆくえ」

猪瀬直樹氏

(一般財団法人日本文明研究所所長、作家)

2017年4月18日

BUTSU GAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

2017年度の物学研究会は「超群体 HYPER NETWORK ランダムな次代をどう生きるか」がテーマです。初回は元東京都知事で現在は日本文明研究所所長、作家として活動されている猪瀬直樹さんをお招きし、「この国のゆくえ」と題し語っていただきました。最新作の『東京の敵』（角川新書）では、東京五輪の迷走や築地市場豊洲移転問題などに深く切り込みながら、東京が抱える闇を論じられています。これを踏まえ、東京から日本につながる論点を浮き彫りにしながら、この国のゆくえを展望していただきました。

以下、サマリーです。

「この国のゆくえ」

猪瀬直樹氏

(一般財団法人日本文明研究所所長、作家)



01：猪瀬直樹氏

猪瀬 人間の瞬間の記憶は20秒しかもたないといいます。ちなみに犬は3秒です。日本のサッカーがなかなか強くなれない理由もそこにあって、欧米では指導する際に練習試合の途中で「フリーズ」と言って止めさせ、すぐに確認するのに対し、日本の高校などでは練習試合を見終わってから監督がお説教するスタイルです。20秒しか記憶しないから、その場で確認する方が有効なのです。ですから、本日は皆さんにも疑問が生じたら、その場で質問していただきたいと思います。

■国会議員をも動かす都議会のドン

今年、『東京の敵』という本を上梓しました。ここで書いたのはまず「都議会のドン」こと、内田茂氏についてです。今では誰もが知る存在ですが、僕が副知事や都知事を務めていた当時は全く世に知られておらず、『週刊文春』に彼は問題があるから取材せよと何度も進言したのに、「たかが都議会議員でしょ」と却下されたくらいです。彼の名は、僕が有名にしました。昨年7月の東京都知事選でウェブサイトの「NEWSPICKS」で取り上げ、そこから Twitter

や Facebook で拡散したので数百万人への読者に知れ渡りました。

東京都議会の構造が背景にあります。トップに立つ石原伸晃自民党東京都連会長には何の権限もなく、いわばシャッポ（帽子）のような存在です。一方、内田茂氏が担っていた自民党都連幹事長という役職は、自民党の都議会・区議会・市議会議員の公認権を持っています。区議会議員だけで 900 名ほどおり、彼ら区議会や都議会の議員の動員がないと国会議員は当選できないのです。つまり公認権を持つ幹事長こそが、共産党でいう書記長のように権勢を振るっているということ。だから「小池百合子さんを応援したら自民党から除名する」とし、さらにそれは「国会議員、都議会議員、区議会議員の親族等を含む」と書いた。これではまるで北朝鮮の政治と同じです。この事実を僕はネットで配信し、数百万人が知ることとなりました。

それまでも都議会での内田茂氏への抵抗はありました。樺山卓司という、初代台湾総督の曾孫で 5 期当選した都議がそうでした。しかし彼は壮絶ないじめにあい、躁鬱病となり、2011 年 7 月に自殺してしまいました。後に、のし袋に殴り書きした遺書が発見されています。

「これは全てのマスコミに発表してください!! 武士のなさけ。内田許さん、人間性のひとかけらもない内田茂、来世では必ず報復します! ご覚悟、自民党の皆さん。旧い自民党を破壊してください」

彼が自殺した日は反内田派の議員が集まり、氣勢を上げて「よし、頑張ろう」と言って帰ってきた夜だったそうです。しかし躁から一転し鬱状態となり、突発的にビニール袋を被ってしまったのです。自殺するときとはそういうもので、朦朧として行動を起こしてしまうのです。この遺書は鏡台の横に張り付いていてしばらく見つからず、亡くなった当時はベタ記事で「都議会議員、自殺」と小さく報じられただけでした。都議会では、自民党の議員に囲まれ、さんざん罵倒されていたそうです。

■縦割りの隙間の課題に取り組む

僕は 2007 年、知事の石原慎太郎さんより副知事をやって欲しいと頼まれましたが、「議会が承認しないので、建前上、権限を外すことで承認を得た。分かってくれ」と言われました。霞が関に外務省や経済産業省、厚生労働省などがあるように、東京都にも財務局や産業労働局、福祉保健局、建設局などがあります。中央卸売市場というのも一つの局です。それらを 3 人の副知事が 5 つずつ束ねていますが、その権限を与えないようにしない限り、承認されないというのです。結局、僕は、知事の特命事項と羽田空港の国際化や横田基地の返還交渉など、国がらみの交渉のみ権限を与えられることで承認されました。

石原さんは大統領と同様に都民に直接選ばれていますが、二元代表制なので政府の与党から選ばれる総理大臣と異なり、議会が与党でなければ予算案などの承認は得られません。さらに石原さんの長男の伸晃氏は都連会長を務めていましたし、三男の宏高氏は大田区から出馬した国会議員で、いわば息子 2 人を人質に取られているようなもの。でも石原さんは、どんどん自分の政策を進めていき、内田氏の言うことを聞いていたわけではありません。

赤坂見附の清水谷公園の横に 20 階建ての議員宿舎を建設する計画が持ち上がったことがありました。大久保利通が暗殺された歴史が刻まれた公園です。僕は石原さんに「ここにある樹齢 100 年、200 年の木を伐採したら、取り返しがつきません。それにあそこは東京都風致地区条例で 20 メートル以上の建物を建ててはいけない地域のはず。高層ビル建設が認められるのはおかしい」と訴えた。石原さんは一瞬、迷った顔をしました。僕は知らなかったのですが、実はそこは内田氏の地元だったのです。

それは国有地ですから、地方の条例では計画を止めることはできません。国が建築確認申請をすると、東京都は協議しなければならず、協議すれば申請は自動的に受理されるという流れです。そこで僕は参議院の事務局が申請の封筒を持って来た際に、わざと関係ない話でいちゃもんをつけて怒鳴りちらし、封筒を渡せないように仕向けました。計画は頓挫して、内田氏は烈火のごとく怒りました。こちらから電話しても彼は一度も出ませんでした。

この話が示すのは、縦割りの隙間に、行政の課題がたくさんこぼれているということです。僕は、縦割りの枠を飛び越えて、どんどん課題を解決するやり方で改革を進めていきました。その一つが、周産期医療の問題です。出産直前の女性が脳溢血になり、脳外科と産科が一緒に機能できる病院がなかったため救急車がたらい回しされ、妊婦が亡くなることがありました。これを解決するために、各ラインから優秀な人材を集めたプロジェクトチームをつくったのです。

地下鉄・九段下駅を都営と営団で分断していた「バカの壁」に穴をあけたのも同様の方法でした。

■闇に光を当てる SNS の力

内田氏は 2009 年の選挙で落選しています。彼のように古いタイプの政治家は、地元の千代田区でいうと神田の商店街や卸街などの古い町には顔が利くけれど、若い人が住む番町のマンション街などには弱いのです。代わりにこの時に当選したのは 20 代の青年でした。しかし「月夜ばかりじゃないよね、夜道は」と凄まれたのかどうかわかりませんが、その 4 年後、青年は選挙区を変えて立候補することとなりました。僕も『東京の敵』にありのままを書いているので、身近に気をつけろと警告されています。これに対して、落選したはずの内田氏は、そのまま幹事長を続けていました。

豊洲問題も、しかり。汚染ばかりが問題になっていますが、問題の本質はこういうところにあるのです。2013 年 11 月 18 日に 600 億円で豊洲市場の第一次入札があり、その数日後、僕は徳洲会事件というのに巻き込まれ、12 月 24 日に辞職しました。その 3 日後に第二次入札予定価格の報告があり、1000 億円になっています。600 億だったものが、辞めた 3 日後に 1000 億に跳ね上がり、舩添要一さんが都知事に就任した翌日、入札が決定しました。だから舩添さんは何も知りません。都知事が不在の時に、連続している権力は何かということなのです。さらに、去年の 7 月 14 日に東京都知事選の告示があり、7 月 31 日に小池知事が当選しました。空席の 7 月 21 日に、築地解体工事の落札が行われています。

背後には何があるのか。梶添さんもこの問題を明らかにしようとしたけれど、できませんでした。湯河原に行っていたことが問題視されましたが、1年52週のうち48回も湯河原に行ったり、豪華な海外出張も非難されたけれど、都議会のドンが全部、決めちゃうから舛添さんは他にやることがなかっただけなのです。

僕は小池さんを応援し、リベンジを果たさなければいけないと思いました。そこで、まずドンの存在をネット上で明らかにし、先ほどの遺書や北朝鮮みたいな司令を世に知らしめ、有名にしました。ところがネット上では話題になっているにもかかわらず、地上波テレビもマスメディアも及び腰で、どこも取り上げませんでした。ようやく『週刊文春』がギリギリになって取材に来たぐらいです。ただし、調べてもドンの過去はなかなかあぶり出せないのです。

都議選のある7月31日までは一切、地上波テレビは報道していません。そして8月1日、選挙の決着がついてからは連日、テレビでは「内田ドン」を取り上げ始めました。

局面を変える時にテレビは全く役に立たず、代わりにSNSが小池選挙をつくっていました。今でこそ、内田ドンは有名になりましたが、当初は無名でした。闇に棲む者は光を当てることで力を失います。それができるのがSNSの力なのです。闇のドンが存在し、小池さんという人がジャンヌ・ダルクのように現れて、大きなうねりになっていきました。この時、地上波テレビはただ騒ぎ立てるだけなのです。環境基準で合格しているものでさえ文句を言ったり、行き過ぎたりするのがメディアなのです。

■方向性はすでに見えている豊洲問題

僕は、豊洲は移転すべきだと思います。今の小池さんは戦術的な世界で行きすぎている感がありますが、現実問題として、豊洲に移転するしかないからです。昭和10年(1935)に開設された築地市場は、当時主流だった貨物輸送に合わせてあり、列車が入るためにカーブした丸い構造で、現在の物流の状況に対応できていません。現在は高速道路が主体で、Amazonをはじめ物流倉庫の多くは湾岸にあります。豊洲はそういう構造を考えて設計されています。

築地の仲卸の人たちは権利の問題で残りたいと主張しています。バブルの頃に1000億あった築地の売り上げは、600億円くらいまで下がってきています。そもそも、中央卸売市場は不要なのではないかという議論もある。イオンやイトーヨーカドーといった流通大手は、産地と直接契約しており、それにより市場の実質的な価格決定権を奪っています。ある意味これは、卸売市場というかたちを守るための保護政策みたいなものなのです。そこに共産党が反対派として加勢して、騒いでいるのが実情です。反対運動があると、行政のコストがどんどん嵩みます。

それともう一つ、築地は汚染されています。現在でも営業中なので声高に言うてはいけない紳士協定がありますが、現実的には1万匹のドブネズミがいると考えられています。

豊洲移転は大きなテーマになっていますが、方向性としてはほぼ片付いています。ここま

で、何か質問はありますか。

黒川：豊洲移転はいつ頃決まるのでしょうか。

猪瀬：それは分かりませんが、小池さんの思惑を超えてメディアが走っているので、ギリギリになるかもしれません。メディアは豊洲にまつわる談合について切り込むべきところを、ワイドショーで汚染を取り上げて、暴走しています。

東京五輪問題もしかり。こちらのドンは、森喜朗元総理です。僕はドン2人とぶつかったわけですね。内田ドンは議員を引退したので、ほぼ退治できましたが、こちらの方は全然進んでいません。

■新国立競技場案の知られざる顛末

ザハ・ハディオの新国立競技場案は、1300億円の予算で安藤忠雄さんが最終決定を下しました。ところが東京招致が決定してから、突然3000億円という数字になった。「これはおかしい、すぐに東京都で委員会を立ち上げよう」と提言した頃、僕は辞めることになりました。予算は最終的には2割削減して2500億になっていましたが、すぐに再び3000億にふくれあがりました。辻褄が合わないことばかりですが、森さんは「なぜ3000億円じゃいけないんだ」と主張します。

時を同じくして安倍総理は、世論の8割から問題視されていた新国立競技場案に目を付けます。集団的自衛権を強行採決する日の夜、森さん呼び、「悪いけど、ザハ・ハディオの案はやめましょう」「予算も1500億にしましょう」と言い、ゼロからやりなおすことになったのです。

総理が予算を1000億減らすよう提言をしたのに確かな試算があったわけではないと思いますが、これにより、屋根のないプランに決まりました。コンペ案は隈研吾さんと大成建設によるA案、伊東豊雄さんと竹中工務店によるB案が提出されました。実は、コンペ前から大成建設の案で決まっていたのも同然なのです。なぜならザハ・ハディオの案のときに、スタンドを担当していたのが大成建設だったからです。竹中工務店は屋根の担当でした。屋根がないプランですから、大成建設の受注で大方決まりなのです。それなのに森さんは、テレビでわざとカモフラージュするためなのかわかりませんが「僕はB案の方がいいかな」と言った。見え見えです。伊東豊雄さんは、当て馬にされて気の毒でした。

目下の問題は、予算の関係で、エアコンがつけられないことですね。東京の夏は熱帯ですから、お年寄りや体の不自由な人は、熱中症で倒れてしまいます。100億増額すれば設置できるので、当時の遠藤利明オリンピック大臣にそう伝えたところ、「自分には権限がないのでできない」という。「総理に訴えて欲しい」と言いましたが、埒があかない。総理は、あくまで東京都の問題として東京五輪に全く関心を示しません。

まずは一刻も早く、東京五輪のドンを退治しなければならないのです。でも、みんなオリンピック絡みの商売をやっているんで、怒らせちゃいけないと思って声を上げませんね。

関：なぜそんな人が、それほどまでに実力があるのでしょうか。

猪瀬：そこなんです。僕もそこを見くびって失敗しました。エンブレム問題も彼が一枚からんでいます。当初デザインは日の丸が東京の T の下方に位置づけられていました。それを目にして「なぜ日の丸が下になるんだ」と、噛みついたのが発端です。結局デザインを修正することとなり迷走し、T が L のようになり、ベルギーの劇場と類似してしまいました。聖火台も最初は空中に浮いているという案でした。それぐらいハッと驚かせるような話なのに、忘れてしまうのですから話になりません。

黒川：誰でも気づくはずですけどね。

猪瀬：サメの脳みそと揶揄される人ですから。オリンピック招致は、文化論です。自著『ミカドの肖像』に書きましたが、東京の中心には皇居がある。財布を落としても返ってくる、電車は3分後に必ず動いている。そういうところの近代とは何か。マネジメントもきちんとできているのが我々の文化であり、ヨーロッパとは違った近代社会があり、おもてなしがある。その上でキーは皇室だと考え、宮内庁と交渉し、三笠宮彬子様、そして高円宮妃殿下にお力添え頂きました。

しかし IOC の公式プレゼンテーションを終えて帰国すると、新国立競技場の予算が 3000 億になったと新聞にリークされていました。これは魂胆がある、ゼネコンと森さんあたりで何かやっている、と推察するしかありません。

ワールドカップや万博は国が担いますが、オリンピックは組織で担い、サインするのは都市です。組織委員会は、徹底的にコストを厳しく管理する体制となるよう組織図をつくり、森さんは顧問団に据えていたのです。その情報が漏れていたのでしょう。森さんは官邸に駆け込みました。

しょうがないから僕は須田官房長官のところに行き、これは東京都と JOC がサインしていること、組織委員会の会長を決める権限は安倍総理にはないですと言って来ました。

すると、その後はなぜか産経新聞の一面に森さんのインタビューが載り、『文藝春秋』もなぜか突然、森さんの発言が 10 ページほど掲載されました。そして、「オリンピック招致に尽力したのは俺だ、猪瀬は前の方でチャラチャラしていただけだ」と書かれました。

変だなと思っていた矢先、朝日新聞に徳洲会のリークが載り、やれ収賄だ、と大騒ぎとなり、辞任することとなりました。

■オリンピック招致の戦略と意味

一言申し上げておきますが、あれは収賄などではありません。自民党東京都連に選挙のポスターを送ったら、敵対していたため貼れないとして、丸々送り返してきたため、いろいろな宗教団体や労働組合などを回ったのです。徳洲会はその一つでした。そのやりとりでお金を借りたのですが、使わずに返しています。借りたお金を返したことを収支報告書に書かなかったことが、罰金の対象となったということです。弁護士は使わなかったので収支報告書に記載する必要はないと主張しています。こうして舂添さんが都知事となり、ドンの傀儡政権になり、施設の値段はどんどん上がっていったのです。小池さんに、もう一踏ん張り、なんとか頑張ってもらわないですね。

ここまでで、質問はありますか。

Q: 日本では落としたお財布が返ってくるというお話がありました。お天道様が見ているといった教育や文化があるにも関わらず、なぜ闇のドンが暗躍してしまうのでしょうか。

猪瀬: 質問が飛躍しているね。タクシーにお財布を置き忘れても返ってくるし、その辺をうろろ歩いても襲われないというのは、世界でも稀有なこと。そういうのは日本の文化でしょう。それとドンの存在は、また別の話です。

小泉純一郎元総理の時代に、僕は道路公団の民営化を担いました。当時の権力は経世会、つまり田中角栄の流れが握っていました。小泉さんが言った「抵抗勢力」とは経世会にまつわる道路の利権なのです。森さんは、小泉さんとともに経世会に対抗した清和会に属していました。清和会は小学校から大学まで、建設も含めた文教族に支えられた派閥です。やがて経世会は勢いをなくし、実態を失った。小泉政権下の5年半の間に、森さんは派閥の仲間への人たらしをしていたんです。人間関係でも、仕事ができない同士がつるんでよく飲んだりするのと同じ。関係性だけはつくっているのです。

Q: オリンピック招致の勝ちシナリオ、戦略は、どういうプロセスで描かれたのでしょうか。

猪瀬: これはよい質問だね。35年前に僕が書いた『昭和16年夏の敗戦』という本があり、ベストセラーとなりました。2010年に、石破茂さんは当時の首相・菅直人さんにこの本は読んだかと迫ったのです。もちろん菅さんは読んでいないわけじゃないけど。これは、昭和20年(1945)に日本は敗戦を迎えましたが、昭和16年(1941)の夏にすでに負けているという話なのです。その夏、政府は大蔵省や商工省、陸運生、海運生、日銀、日本製鉄などから30代前半の若者を30人集め、日本とアメリカが戦争したらどうなるかを徹底的にシミュレーションさせたのです。結果は、初めは勝つけれど、3~4年で負ける、最後はソ連が参戦して終わりというものでした。僕は、そのシミュレーションをやった人たちに会って話をし、当時の日記も集めて再現し、本にまとめました。

石破さんが菅さんに読んだかと詰問しましたが、霞が関の人はみんな読んでいます。ここ

で読んでない人がいたら、ぜひ、読んで下さい。

なぜこの話をしたかという、そのシミュレーション結果をもってしても、結局、縦割りの情報だけが残し、中枢がつかれないまま、意志決定できずに時間切れとなったからです。戦争せざるを得ない状況となったのです。縦割りでは、戦争は負けるのです。海軍は自分の持っている油の量を陸軍に言わない。敵はアメリカなのに味方が持っている石油の備蓄量がお互いわからないようでは、勝てるわけではないでしょう。

2020年の五輪招致も戦争だと思ったわけです。東京都は縦割りだらけ。まず情報の中枢をつくらないと戦争には勝てません。例えば外務省がODAをどの国にどれだけ投じているかを確認してそれぞれ対話しました。途上国の委員に「お宅の国と良い関係でいたいよね」、という話をしていくわけです。日本の各競技団体も世界の各競技団体とつながっているのでその情報も集約します。その情報の中枢をつくり戦うというのをものすごいスピードでやっていったのです。戦争だと思って挑み、その戦争に勝った。チーム日本の勝利だったけれど、その後、僕が去って、チーム日本の解体が勃発してしまったのです。

Q: 石原都政では、日本のダイナモが東京として、日本を元気にするための五輪招致活動をしました。猪瀬さんはオリンピックを招致して何を目指していたのでしょうか。

猪瀬：石原さんは、オリンピックを招致しようと決めただけでも偉いですよね。世界のアスリートを東京に集めようとか、思いつくことがすごいんだよね。本人は1回で受かると思っていたんです。そういうところが、無謀でいいところ。現実には、一回で受かったところはほとんどありません。でも本人はそれを知らず、落選した飛行機の中では泣いていたそうです。

企画とは、大胆で、誰もやらないことをやるのが重要。でもこの場合は、ツメが甘かった。僕は2回目だから勝負の時であり、勝たなければ終わりでした。なぜならその次の2024年はパリが選出されることがほぼ決まっているようなものだから、ここで敗れたら東京の3回目の立候補はあり得なかったのです。

招致活動をした2013年は、リーマンショックから立ち直れず、総理大臣は毎年変わり、日本は駄目だ、駄目だと自虐的な空気が蔓延していました。だから7年後に希望をつくれれば、それに向かって目標ができる。そうすると歴史感覚も生じるんです。7年後にどうしたいかと思うようになるのが歴史認識の始まりなのです。

平成生まれの子どもは、生まれた時から不況でした。昨日と今日と明日は、何も変わらないと思っています。だからこそ、変わるということ、目標があるということの大切さを考える必要がありました。それとスポーツは、やった方がいいでしょう。健康寿命は長いほうがいいですから。

小泉内閣では、さまざまな民営化にも着手しました。セコムは民営刑務所（民活刑務所）までやっています。刑務所とは宿泊施設であり、学校なんですね。昔は受刑者がダンスなど

をつくっていましたが、その技術を身につけても今や就職できません。だからパソコン教室をやっています。そういう発想を民間主導で進める改革を小泉内閣で決め、後に実現しているんですね。

■これからの日本のゆくえ

東日本大震災の時にあった、気仙沼の奇跡の救出劇についてお話ししましょう。気仙沼は津波に飲み込まれ後に船から漏れた重油やハザードランプがショートして引火し、街中が激しい火災に見舞われました。マザーズホームという障害者施設の人々は、園長の内海直子さんと公民館に避難していたものの、燃え続ける街並みの中で孤立し、取り残されてしまった。絶望に駆られた内海さんは恐怖で震える手を堪えながら、ガラケーで「火の海 だめかも がんばる」と、ロンドンにいる息子にメールしたのです。そのメールを見た息子は、火の海からすぐにでも母を助け出したいと思ったことでしょう。でも遠く離れていて、行くこともままならない。公民館の中で孤立している母を思い、彼は **Twitter** でその状況を訴えたのです。

「障害児童施設の園長である私の母が、その子供たち 10 数人と一緒に、避難先の宮城県気仙沼市中央公民館の 3 階にまだ取り残されています。下階や外は津波で浸水し、地上からは近寄れない模様。もし空からの救助が可能であれば、子供達だけでも助けてあげられませんかでしょうか」

140 字でもこれだけの情報を伝えられます。彼はロンドンでユダヤ人とのビジネスを通じて、ファクトとロジックで伝える技術を磨いていました。当時、東京都庁の HP は問い合わせでパンクしてしまい、僕はせめて **Twitter** だけでも情報をとろうと、吸い上げさせていました。そういう中で、ある人が件その **Twitter** を僕の所に届けたのです。

これを見て気仙沼が火の海になっていると知りました。これは大変だと、すぐに東京消防庁の防災部長に掛け合いました。どうやらデマではなさそうだと互いに判断し、ヘリを出すことを決めたのです。

翌朝朝一番でヘリを飛ばし、現地に赴くと、そこには取り残された 446 名がひしめいていたのです。なぜヘリコプターが来たのだろうかと思議がられ、内海さんのメールに端を発した奇跡のプロセスを説明しました。

ショートメールならばなんとか打てた園長の内海さん、**Twitter** を駆使し状況を伝えたロンドンの息子、それをキャッチして転送して僕の所に届けた人、僕の要請に応じた消防庁の防災部長。この中の誰一人欠けても、この救出劇は成立しませんでした。まさに奇跡のリレーです。

この顛末は『救出』という本にまとめました。それぞれみんなに物語があるのです。それぞれの責任があり、一人ひとりの役割があるのです。

もう 1 冊、二宮金次郎の本も書いています。彼は、小田原の町を歩いて、床屋やお風呂屋

から情報を仕入れ、薪を売って金を貯め、二宮金次郎ファンドをつくりました。いまでいう産業再生機構みたいなことをやったのです。コストカットの意識が高く、お金を貸しながら経営コンサルを行い、産業を再生させました。江戸時代の最初の100年は高度経済成長期でしたが、二宮金次郎が活躍したその後の150年間はゼロ成長期でした。でもその文化文政期に、アートの深掘りができ、北斎をはじめ、すごい文化が築かれるわけです。こうした歴史がわからないと、ビジョンはできないのです。

Q: 政治の世界は民間からみるとずれており、国会中継の質問などを聞いていても「デザイン感覚」のなさを感じます。政治の世界ではそのところをおかしいとは思っていないのでしょうか。

猪瀬: おかしいよね。レベルが低すぎます。2世や3世ばかりだからかもしれません。小泉さんのところみたいに4代続くと歌舞伎同様に、型ができてくる。型までいくといいけれど、多くは中途半端で駄目なんです。今考えると、小泉さんのワンフレーズはTwitterだったね。140字で収まっているし、言葉も持っていた。それに対して安倍さんは言葉が一つも残っていないし、印象も何もない。思想を感じられない。石原さんは結構、面白いですよ。厚化粧と言ったのはまずかったけれどね。

ともかく今の状況が日本のレベルを表しているとなると、まずいこと。野党が存在しないも同然で、安倍さんに対抗する勢力もない。安倍さんは何にも勝負しないで、ただ長持ちしているだけのように見えます。もっと与党、野党に頑張ってもらわなければいけません。

関: ありがとうございます。猪瀬さんは政治を語りながらも、デザインに通じるお話をも含んでくださいました。これからも日本人を刺激するような本を書いていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

以上

2017年度 第1回物学研究会レポート
「この国のゆくえ」

猪瀬直樹氏

(一般財団法人日本文明研究所所長、作家)

写真・図版提供

01 ; 物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998～2017 BUTSUGAKU Research Institute.